

# アブラツノザメ 日本周辺

(North Pacific spiny dogfish *Squalus suckleyi*)



## 管理・関係機関

なし

## 最近の動き

2024年の我が国のアブラツノザメの推定漁獲量は2,404トンであり、1990年以降の漁獲量は横ばい傾向で推移している。近年、沖合底びき網漁業（以下、沖底）の標準化した単位漁獲努力量当りの漁獲量（標準化CPUE）は減少、アブラツノザメの主分布域である津軽海峡周辺の底はえ縄漁業の標準化CPUEは横ばい、と異なる傾向を示すが、本資源は長期的に変動を繰り返すことから動向の判断が難しく、引き続き注視していく必要がある。

## 利用・用途

第2次世界大戦前後は、ビタミンAや肝油の原料として高い需要があったが、合成ビタミンAの普及によりアブラツノザメ漁業は衰退した（Yano *et al.* 2022）。東北地方では刺身や煮物、照り焼き等で食されるほか、ちくわ等の練り製品原料として利用される（田向 2021）。近縁種の *Squalus acanthias* とともに世界で最も利用されるサメとしても知られ、魚肉中の尿素的含有量や水銀の蓄積量が他のサメ類と比較して少ないことから、ヨーロッパ諸国では水産資源としての評価が高い（Ketchen 1986, Bargmann 2009, Dell’Apa *et al.* 2015）。近年では、肝油や軟骨エキス等が健康補助食品の原料として利用されており、本種の用途は多様化している。

## 漁業の概要

我が国では、アブラツノザメは多くの統計資料でサメ類として他種と一括して扱われているため、単一種としての漁獲量は明確ではない。1953～1967年の一時期にのみ都道府県別のアブラツノザメの漁獲統計が整備されていたことから、この資料を元に都道府県別にサメ類の漁獲量に占めるアブラツノザメの割合を求め、その割合と各年のサメ類漁獲量からアブラツノザメの漁獲量を推定している（Yano *et al.* 2022、図1）。この推定漁獲量と文献情報とを合わせ、以下にアブラツノザメの漁業及び漁獲の概要をまとめた。

本種は北日本の太平洋側や日本海側では、少なくとも江戸時代から漁獲されていたものと思われる。本種が漁獲対象として注目されるようになったのは明治30年代末頃からであり、北

海道や青森、秋田、石川県等で当初はマダラ等を対象とした底はえ縄漁船の兼業対象種として漁獲された（田名部ほか1958）。昭和初期になると、機船底びき網で本種を漁獲するようになったが、第2次世界大戦頃には資材の不足により底はえ縄による漁獲が主体となった。太平洋戦争後は、食糧増産政策に伴い、主に機船底びき網により積極的に漁獲されるようになり、1952～1955年の平均漁獲量は約4.1万トンに達した。その後、漁獲量は1950～1960年代の合成ビタミンAの普及による国際取引の減少とそれに伴う魚種単価の下落により急激に減少した。現在、本種は主に、以前に比べて本種を主対象とする操業が減少した沖底と本種を主対象とする底はえ縄に

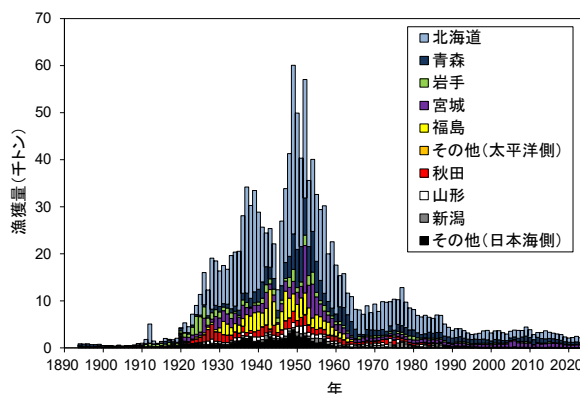


図1. サメ類漁獲量から推定したアブラツノザメの漁獲量（1894～2024年）

1894～2025年の我が国の生産統計年報等（※）の漁獲量情報を用いて作成。

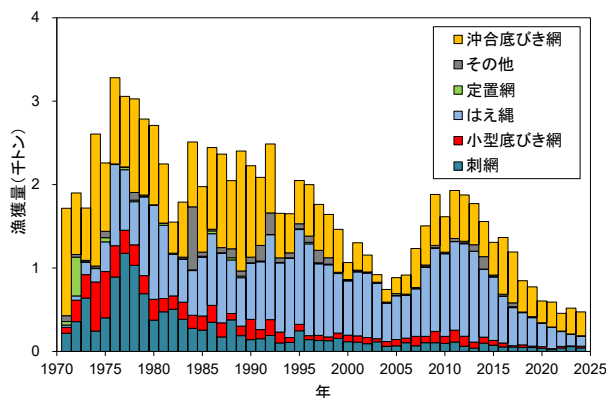


図2. 青森県におけるサメ類の漁獲量（まぐろはえ縄、流し網を除く、1971～2024年）

1971～2025年の青森県の漁獲量情報（※）より作成。

より漁獲されている (Nakano *et al.* 2009, Yano *et al.* 2022)。日本周辺の本種の推定漁獲量は、1990 年以降 2,000~4,500 トン程度で比較的安定して推移している。

近年の推定漁獲量の 20%程度を占める青森県の漁獲統計では、サメ類としての集計しかないものの、その中にはアブラツノザメが多く含まれると考えられる。そこで、漁獲統計資料の漁業種別魚種別漁獲量から、まぐろはえ縄等表層性のサメ類を多く含むと考えられる漁法を除いた数値をアブラツノザメの漁獲量と推定して集計したところ (図 2)、1971 年以降、アブラツノザメと考えられるサメ類の漁獲量は増加し、1976 年には 3,300 トン程度となった。1980 年代及び 1990 年代の漁獲量は若干減少して 1,400~2,800 トン程度でほぼ横ばいで推移し、2004 年には約 740 トンに減少した後、2005 年以降増加に転じた。2011 年以降漁獲量は減少し、2024 年には合計 474 トンとなった。沖底で 286 トン (約 60%)、底はえ縄で 121 トン (約 25%) と、アブラツノザメを狙って操業している底はえ縄と規模の大きい沖底の漁獲量が大きな割合を占めている。

## 生物学的特性

### 【分布】

北太平洋のアブラツノザメについて、形態学的・遺伝学的な比較により北太平洋以外に分布する *S. acanthias* とは別種の *S. suckleyi* であるとする報告がなされたため (Ebert *et al.* 2010)、本報告では日本周辺のアブラツノザメを *S. suckleyi* として扱った。本種は、北太平洋の陸棚域全域に広く分布し (阿部 1986、図 3)、日本周辺とアラスカ湾東部沿岸域は本種の重要な生息海域にあたる (Yano *et al.* 2017b)。東北や北海道の沖合に多く、太平洋側では千葉県以北、日本海側では山口県まで生息している (吉田 1991、中坊 2013)。東北地方の太平洋側では水深 150~300 m に分布する。沖底による経緯度 10 分メッシュの漁獲量分布をみると、太平洋側、日本海側ともに東北地方北部に漁獲の多い場所が集中しており、中でも青森県の津軽海峡周辺での漁獲が多い (図 4)。このことから、近年の本種の日本周辺における主分布域は津軽海峡周辺であると考えられる。なお、津軽海峡内では雌雄が生息場所を分離することが、

主要水揚港の漁獲物体長組成調査より明らかにされている (Yano *et al.* 2017a)。

### 【産卵・回遊】

本種は胎生で、妊娠期間は 20~22 か月と長く、体長 20~25 cm 程度に成長した胎仔は 2~4 月に産出される (山本・木部崎 1950, Yano *et al.* 2023)。繁殖場は特定されていないが、青森県太平洋沿岸で産出直後とみられる臍の緒痕を有する個体が多数採集されるため、その周辺に出産場があると考えられる (Yano *et al.* 2023)。

日本周辺では、1950 年代以前に日本海側と太平洋側のそれぞれにおいて、秋冬に南下し、春夏に北上する群れが存在したと報告されている (田名部ほか 1958)。1972 年以降の季節回遊を調べた研究では、日本周辺に來遊する場所は長期的に変化していない一方、來遊時期は気候変動に伴う海水温の上昇によって、2000 年以降、1 か月ほど早くなっていることが示唆されている (Kanamori *et al.* 2024)。

北太平洋では、1978~1998 年にカナダ太平洋岸で標識放流されたアブラツノザメ約 71,000 個体内、30 個体が日本周辺海域で再捕されており (McFarlane and King 2003)、本種は北太平洋の広範囲を移動していると推定されるが、日本周辺で標識放流した個体の北米太平洋岸での再捕記録は現在のところ得られていない。そのため、日本周辺と北米周辺を往来しているのか、北太平洋で 1 つの系群なのか、東西で異なるのか等は明らかではない。

### 【成長・成熟】

北太平洋西部海域では雄は体長 93 cm (体重 5.9 kg)、雌は 115 cm (体重 13.0 kg) に達し (図 5、表 1)、雌の寿命は 60 歳以上である。成熟体長及び年齢は海域や年代によって異なり、日本周辺海域に生息する雌の標準的な成熟年齢は 18 歳 (体長 73 cm)、雄では 9 歳 (体長 61 cm) と推定されている (Yano

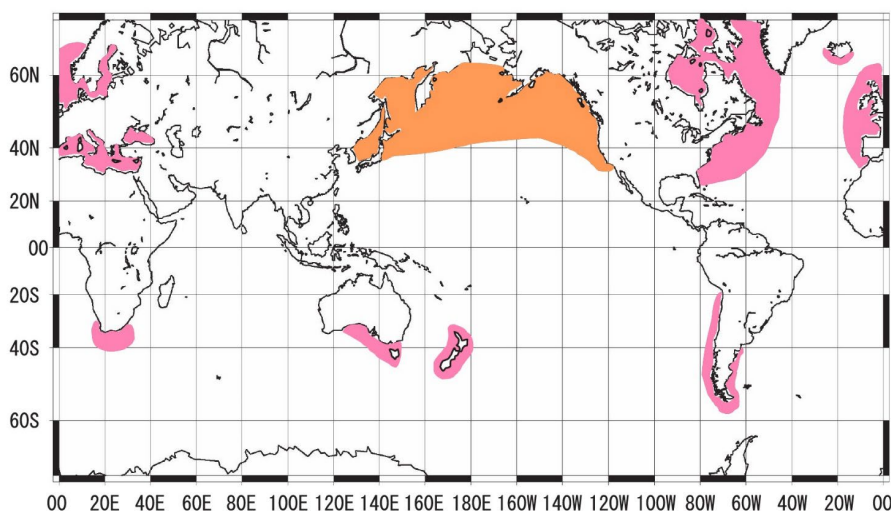


図 3. アブラツノザメ類の分布 (阿部 1986 を改変)  
オレンジ色: *Squalus suckleyi*、ピンク色: *S. acanthias*。

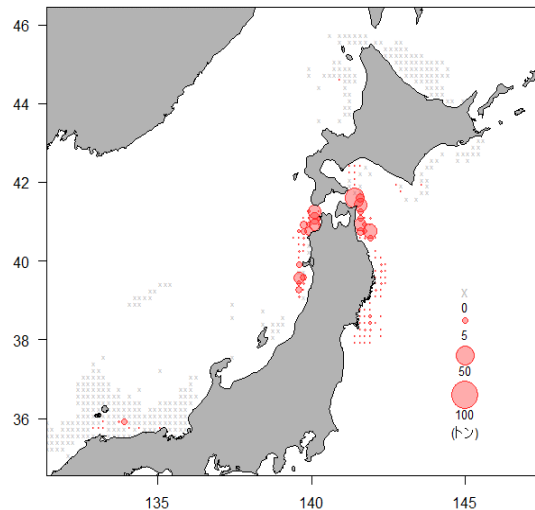


図4. 2019年の沖合底びき網漁業によるアブラツノザメの漁獲量分布

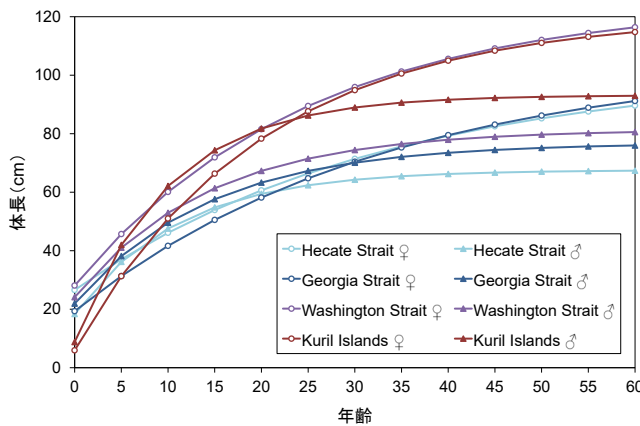


図5. アブラツノザメの雌雄別海域別成長曲線 (Ketchen 1975、Orlov *et al.* 2011、Yano *et al.* 2023 より作成)

表1. アブラツノザメの雌雄別海域別年齢-全長関係式 (Ketchen 1975、Orlov *et al.* 2011)

Hecate Strait	
Female	$L_t = 125.1(1 - e^{-0.03(t+10.6)})$
Male	$L_t = 84.7(1 - e^{-0.09(t+3.7)})$
Georgia Strait	
Female	$L_t = 129.1(1 - e^{-0.03(t+7.3)})$
Male	$L_t = 96.1(1 - e^{-0.07(t+5.0)})$
Washington coast	
Female	$L_t = 152.9(1 - e^{-0.04(t+6.7)})$
Male	$L_t = 101.8(1 - e^{-0.07(t+5.2)})$
Kuril Islands	
Female	$L_t = 147.2(1 - e^{-0.05(t+1.3)})$
Male	$L_t = 116.3(1 - e^{-0.10(t+1.1)})$

*et al.* 2023)。また、日本周辺海域に生息するアブラツノザメの繁殖力は、北太平洋において最も高いと考えられている (Yano *et al.* 2023)。

【食性・捕食者】

主に魚類や頭足類を捕食し、サケやマダラ等の有用魚種も捕食する (Sato 1935、三河 1971)。本種の捕食者については、日本周辺では、東北地方の太平洋岸沖でマダラの胃内容物として出現したことが報告されている (橋本 1974)。

資源状態

【漁獲量の動向】

太平洋北区の沖底では 3 つの漁法による操業が行われている。青森県ではかけまわし、岩手県では 2 そうびきとかけまわし、宮城県以南の各県ではオッターロールであるが、これらの内、アブラツノザメの漁獲が多いのはかけまわしである。漁獲量の動向は、太平洋北区のかげまわしの有漁網数及び津軽海峡で操業する青森県の底はえ縄漁船の延べ操業隻数の推移から把握した。

太平洋北区のかげまわしの有漁網数を見ると、尻屋崎海区では、1980 年以降に増減を伴いながら概ね横ばいで推移している (図 6)。襟裳西海区では、1998 年以降減少傾向にあるが、これは、八戸船籍の沖底船の操業が襟裳西海区よりも近海の尻屋崎海区で増加したためである。2024 年の有漁網数は前年と同程度であり、尻屋崎海区では 2,456 回、襟裳西海区では 940 回であった。岩手海区では 1983 年以降に大きく減少しているが、これは、かけまわしから 2 そうびきへの転換が進んだためである。その後、1999 年以降は 1,000 回前後で安定していたが、2011 年には東日本大震災の影響により 392 回に減少した。2016 年には 501 回となり、2017 年から 2020 年までは 0 回となっていたが、2021 年に 32 回を記録した後、毎年アブラツノザメの漁獲があり、2024 年は 28 回となっている。これらから、太平洋北区のかげまわしの漁獲努力量は、全体としては増減を伴いつつ減少傾向と判断される。

津軽海峡では、主に底はえ縄によって漁獲されており、青森県の三厩と大間漁港が主要水揚港となっている。三厩における底はえ縄の操業隻数は 1999 年までは約 1,000 隻で概ね横ばいで推移していたが、2000 年以降は漁業者の減少に伴って減少

傾向にあり、2024年には34隻となった(図7)。大間においても、2012年以降本種を漁獲対象とした底はえ縄の漁獲努力量(操業隻数)が減少している(図7)。

【資源の水準・動向】

本種について、複数の国・地域が参画する国際的な漁業管理機関による資源評価は実施されていないものの、北太平洋東部では米国やカナダが資源評価を実施しており、それぞれの評価海域において比較的豊度が高く、近年は乱獲状態にないと判断されている(COSEWIC 2011, Bigman *et al.* 2016)。この他、近年のアブラツノザメ資源については国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストによる評価が存在し、2016年に公表された最新の評価におけるレッドリストカテゴリーは、北太平洋東部の“絶滅危惧II類”及び北太平洋西部の“絶滅危惧IB類”から北太平洋全域で“軽度懸念”へと引き下げられている(Bigman *et al.* 2016)。

日本周辺海域に生息するアブラツノザメについては、以下の2つの指標から資源の水準と動向を判断した。1つは1972年以降の沖底漁獲成績報告書から集計した太平洋北区のかけまわしのCPUEで、もう1つは1986年以降の三厩及び大間の底はえ縄のCPUEである。各CPUEについては一般化線形モデルによる標準化を行い、季節や海域等の影響を考慮した(図8、9)。

太平洋北区のかけまわしでは、アブラツノザメが漁獲されない操業が多いため、アブラツノザメの漁獲の有無に関するモデル(以下、有漁確率モデル)と漁獲があった時のCPUEに関するモデル(以下、CPUEモデル)の2つを作成するデルタ型のモデルを用い、有漁確率モデルの推定値とCPUEモデルの推定値を乗じたものを標準化CPUEとした。かけまわしの有漁確率モデルでは、アブラツノザメの漁獲の有無を応答変数、4つの変数(年、季節[1月から順に4か月毎に集約]、海域[赤池情報量基準(Akaike's Information Criteria: AIC)に基づく海域分割を実施し、北部と南部に海域を二分]及びクラスター解析で推定した狙い操業の効果)を説明変数とし、二項分布を仮定して、AICに基づき総当り法で変数選択を行った。AICが最も低くなる変数の組み合わせは、年、季節、海域及び狙い操業の効果であった。かけまわしのCPUEモデルでは、一曳網当りの漁獲量を応答変数、4つの変数(年、季節、海域及び狙い操業の効果)とそれらの変数の交互作用を説明変数とし、対数正規分布を仮定して、AICに基づき総当り法で変数選択を行った。AICが最も低くなる変数の組み合わせは、年、季節、海域、狙い操業の効果及びそれぞれの変数の交互作用であった。

底はえ縄ではアブラツノザメが漁獲されない操業はないため、デルタ型のモデルではなく、CPUEモデルのみを用いた。底はえ縄のCPUEモデルでは、一隻当りの漁獲量を応答変数、5つの変数(年、四半期、水揚港、年と四半期の交互作用及び四半期と水揚港の交互作用)を説明変数とし、対数正規分布を仮定して、総当り法で変数選択を行った。AICが最も低くなる変数の組み合わせは、年、四半期、水揚港、年と四半期の交互作用及び四半期と水揚港の交互作用であった。

かけまわしの標準化CPUEは1972~2000年頃まで増減しつつも横ばいで推移し、2000年代に一時減少し回復した後、そ

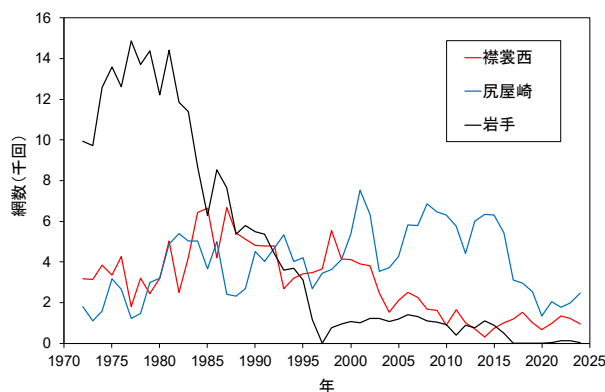


図6. 太平洋北区における沖底(かけまわし漁法)の有漁網数(アブラツノザメが漁獲された操業日の網数)の推移(1970~2024年)

1971~2024年の太平洋北区沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計資料(1971~2018年:東北区水産研究所、2019~2024年:水産資源研究所)より作成。

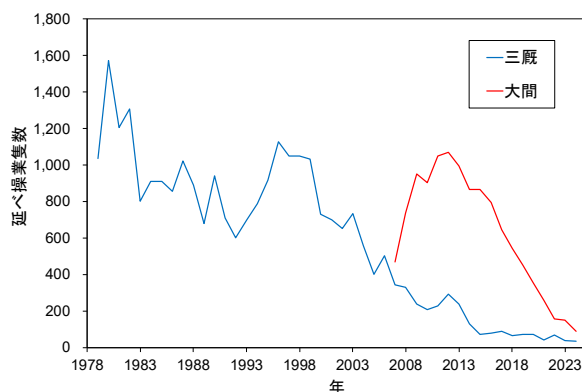


図7. 青森県主要港(三厩及び大間)における底はえ縄の出漁隻数の推移(1979~2024年)

れ以降は再び増減を伴う横ばい傾向となっている(図8)。一方、底はえ縄の標準化CPUEは2013年以降に減少傾向が認められるものの、2019年以降は横ばいで推移している(図9)。かけまわしと底はえ縄の標準化CPUEそれぞれにおいて、最大値から0の間で3等分し、上から高位、中位、低位とした場合、直近年(2024年)の標準化CPUEの値はかけまわしでは中位/下位境界の下にあることから資源状態は現在低位水準、底はえ縄では上位/中位の境界よりも下、中位/下位境界の上に位置することから、中位水準にあると判断される。また、直近5年間の資源動向はかけまわしの標準化CPUEでは減少傾向、底はえ縄の標準化CPUEでは横ばい傾向と判断される。しかしながら、かけまわしの標準化CPUEは1972年以降概ね横ばいで推移しつつも小刻みに変動しており、底はえ縄の標準化CPUEも1990年代から2000年代前半にかけて大きく変動していることから、直近5年間のCPUEの動向は長期的な変動の範囲内における変化である可能性もある。このため、今後のCPUEの推移を引き続き注視していく必要がある。

管理方策

我が国では、津軽海峡で操業を行う底はえ縄漁業者により小型魚の再放流及び漁獲量上限の設定等、資源保全に向けた自主的な取り組みが行われているが、公的な管理方策は実施されて

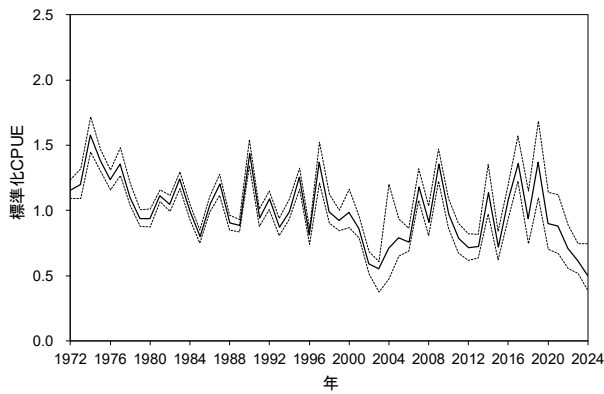


図8. 太平洋北区における沖底(かけまし漁法)の標準化CPUE (1972~2024年)  
標準化CPUEは平均値を1として基準化、破線はブートストラップ法で推定した95%信頼区間の上限値と下限値。



図9. 津軽海峡内で操業を行う底はえ縄の標準化CPUE (1986~2024年)  
1986~2012年の三厩及び2007~2024年の大間の漁獲データを用いた。  
標準化CPUEは1が平均値となるように基準化、破線はブートストラップ法で推定した95%信頼区間の上限値と下限値。

いない。なお、2007年のワシントン条約(CITES)第14回締約国会議及び2010年の第15回締約国会議では附属書IIへの掲載がEUから提案されたが、いずれも採択されず、その後掲載提案は行われていない。

2011年には、カナダのブリティッシュコロンビアにて操業を行うアブラツノザメ漁業が、サメを対象とする漁業としては世界で初めてMarine Stewardship Council(MSC)認証を取得したが、一時的な資源の減少や需要の変化等の複合的な要因から2014年には認証プログラムから撤退した(Shiffman *et al.* 2023)。

執筆者

かつお・まぐろユニット  
かじき・さめサブユニット  
水産大学校 海洋生産管理学科  
矢野 寿和・三澤 遼

水産資源研究所 水産資源研究センター  
底魚資源部 底魚第2グループ

藤原 邦浩・下光 利明

参考文献

阿部宗明(編・監修). 1986. 決定版生物大図鑑 魚類. 世界文化社, 東京. 431 pp.

Bargmann, G.G. 2009. A history of the fisheries for spiny dogfish along the Pacific Coast from California to Washington. *In* Gallucci, V.F. McFarlane G.A. and Bargmann G.G. (eds), *Biology and Management of Dogfish Sharks*. American Fisheries Society, Bethesda, Maryland, USA. 287-295 pp.

Bigman, J. S., Ebert, D. A. & Goldman, K. J. 2016. *Squalus suckleyi*. *In* The IUCN Red List of Threatened Species 2016: e.T195488A2382480.

COSEWIC. 2011. COSEWIC assessment and status report on the North Pacific spiny dogfish *Squalus suckleyi* in Canada. Committee on the Status of Endangered Wildlife in Canada, Ottawa. 45 pp.

Dell’Apa, A., Bangley, C.W., and Rulifson, R.A. 2015. Who let the dogfish out? a review of management and socio-economic aspects of spiny dogfish fisheries. *Rev. Fish Biol. Fish.*, 25:273-295.

Ebert, D.A., White, W.T., Goldman, K.J., Compagno, L.J.V., Daly-Engel, T.S., and Ward, R.D. 2010. Resurrection and redescription of *Squalus suckleyi* (Girard, 1954) from the North Pacific, with comments on the *Squalus acanthias* subgroup (Squaliformes: Squalidae). *Zootaxa*, 2612: 22-40.

橋本良平. 1974. 東北海区漁場におけるマダラの食性と生息水深の変動に関する研究. 東北区水産研究所研究報告, 33: 51-67.

Kanamori, Y., Yano, T., Okamura, H., and Yagi, Y. 2024. Spatio-temporal model and machine learning method reveal patterns and processes of migration under climate change. *J. Biogeogr.*, 51: 522-532.

Ketchen, K.S. 1975. Age and growth of dogfish *Squalus acanthias* in British Columbia waters. *J. Fish. Res. Board Can.*, 32: 43-59.

Ketchen, K.S. 1986. The Spiny Dogfish (*Squalus acanthias*) in the Northeast Pacific and a History of its Utilization. Ottawa: Department of Fisheries and Oceans, Canadian Special Publication of Fisheries and Aquatic Sciences 88. 78 pp.

McFarlane, G.A., and King, J.R. 2003. Migration patterns of spiny dogfish (*Squalus acanthias*) in the North Pacific Ocean. *Fish. Bull.*, 101: 358-367.

三河正男. 1971. 底生性サメ類の食餌. 東北区水産研究所研究報告, 31: 109-124.

中坊徹次(編). 2013. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 神奈川. 2530 pp.

Nakano, H., Semba, Y., and Kitagawa, D. 2009. Fisheries, utilization and stock status of spiny dogfish shark in Japan. *In* Gallucci, V.F., McFarlane, G.A. and Bargmann, G.G. (eds), *Biology and management of dogfish sharks*. American Fisheries Society, Bethesda, Maryland, USA. 335-341 pp.

- Orlov, A.M., Kulish, E.F., Mukhametov, I.N., and Shubin, O.A. 2011. Age and growth of spiny dogfish *Squalus acanthias* (Squalidae, Chondrichthyes) in Pacific waters off the Kuril Islands. *J. Ichthyol.*, 51: 42-55.
- Sato, S. 1935. A note on the Pacific dogfish (*Squalus suckleyi* Girard) in the coastal waters of Hokkaido, Japan. *J. Fac. Sci. Hokkaido Imp. Univ. Ser. 6, Zoology*, 43: 127-141.
- Shiffman, D., Bangley, C. & Macdonald, C. 2023. "A prized Pacific shark": the rise and fall (and rise again...?) of the world's first ecolabel certified sustainable shark fishery. *J. Fish Biol.*, 103: 623-634.
- 田向常城. 2021. 青森サメ食文化の変遷と現在～弊社の展望と挑戦～. *日本板鰐類研究会報*, 57: 42-59.
- 田名部正春・福原 章・菅野嘉彦・鶴川正雄・遊佐多津雄・小島伊織・長峰良典. 1958. 対馬暖流開発調査報告書, 第4号. 水産庁, 東京. 84 pp.
- 山本孝治・木部崎 修. 1950. アブラツノザメに関する研究 (第一報) 成長に伴う生殖腺の變化と成熟に就て. *日本水産学会誌*, 15: 531-538.
- Yano, T., Hattori, T., Narimatsu, Y., Nagao, J., and Tanaka, S. 2023. High reproductive potential of the commercially exploited shark *Squalus suckleyi* in the major fishing grounds of the western North Pacific. *J. Fish Biol.*, 103: 260-271.
- Yano, T., Hattori, T., Shibata, Y., and Tanaka, S. 2022. Over 120 years of landing trends in Japan, for the commercially exploited shark species, *Squalus suckleyi*. *Fish. Res.*, 249: 106257.
- Yano, T., Hattori, T., Tamukai, T., and Ohshimo, S. 2017a. Body-length frequency and spatial segregation of the North Pacific spiny dogfish *Squalus suckleyi* in Tsugaru Strait, northern Japan. *Fish. Sci.*, 83: 917-928.
- Yano, T., Ohshimo, S., Kanaiwa, M., Hattori, T., Fukuwaka, M., Nagasawa, T., and Tanaka, S. 2017b. Spatial distribution analysis of the North Pacific spiny dogfish, *Squalus suckleyi*, in the North Pacific using generalized additive models. *Fish. Oceanogr.*, 26: 668-679.
- 吉田英雄. 1991. アブラツノザメ. *In* 長澤和也・鳥澤 雅 (編), 北のさかなたち. 北日本海洋センター, 札幌. 6-7 pp.
- 漁獲量情報の出典**
- ・我が国の漁獲量 (図1)
- 1894～1896年: 第9次～第11次 農商務統計表. 農商務省大臣官房文書課. 農商務省, 東京.
- 1897～1898年: 第12次～第13次 農商務統計表. 農務大臣官房文書課. 農商務省, 東京.
- 1899～1900年: 第14次～第15次 農商務統計表. 農務大臣官房統計課. 農商務省, 東京.
- 1900年: 第16次 農商務統計表. 農商務省総務局統計課. 農商務省, 東京.
- 1902年: 第17次 農商務統計表. 農商務省総務局統計課. 農務省, 東京.
- 1903年: 第18次 農商務統計表. 農商務省総務局統計課. 東京統計協会出版部, 東京.
- 1904～1912年: 第19次～第27次 農商務統計表. 農務大臣官房統計課. 東京統計協会出版部, 東京.
- 1913年: 第28次 農商務統計表. 農務大臣官房統計課. 東京統計協会, 東京.
- 1914～1917年: 第29次～第32次 農商務統計表. 農務大臣官房文書課. 東京統計協会, 東京.
- 1918～1919年: 第33次～第34次 農商務統計表. 農務省大臣官房文書課. 東京統計協会, 東京.
- 1920～1923年: 第35次～第38次 農商務統計表. 農務大臣官房統計課. 東京統計協会, 東京.
- 1952～1954年: 第28次 (昭和26年)～第30次 (昭和28年) 農林省統計表. 農林省農林経済局統計調査部. 農林省農林経済局統計調査部, 東京.
- 1955～1961年: 農林省農林経済局統計調査部. 昭和29年～昭和35年 漁業養殖業漁獲統計表. 農林統計協会, 東京.
- 1962～1963年: 農林省統計調査部. 昭和36年～昭和37年 漁業養殖業生産統計年報. 農林統計協会, 東京.
- 1964～1972年: 農林省農林経済局統計調査部. 昭和38年～昭和45年 漁業養殖業生産統計年報. 農林統計協会, 東京.
- 1973～1978年: 農林省統計情報部. 昭和46年～昭和51年 漁業養殖業生産統計年報. 農林統計協会, 東京.
- 1979～1984年: 農林水産省統計情報部. 昭和52年～昭和57年 漁業養殖業生産統計年報. 農林統計協会, 東京.
- 1985年: 昭和58年 漁業 養殖業生産統計年報, 昭和59年 漁業・養殖業生産統計年報. 農林水産省統計情報部. 農林統計協会, 東京.
- 1986～2003年: 昭和60年～平成13年 漁業・養殖業生産統計年報. 農林水産省統計情報部. 農林統計協会, 東京.
- 2004～2005年: 平成14年～平成15年 漁業・養殖業生産統計年報. 農林水産省統計部. 農林統計協会, 東京.
- 2006～2015年: 平成16年～平成25年 漁業・養殖業生産統計年報 (併載: 漁業生産額). 農林水産省統計部. 農林水産省, 東京.
- 2016年: 平成26年 漁業・養殖業生産統計年報 (併載: 漁業生産額). 農林水産省大臣官房統計部. 農林水産省, 東京.
- 2017～2020年: 平成27年～平成30年 漁業・養殖業生産統計年報 (併載: 漁業産出額). 農林水産省大臣官房統計部. 農林水産省, 東京.
- 2021～2025年: 令和元年～令和6年 漁業・養殖業生産統計年報. 農林水産省大臣官房統計部. 農林水産省, 東京.
- ・青森県の漁獲量 (図2)
- 1971～2002年: 青森県漁業の動き. 東北農政局青森統計情報事務所.
- 2003～2025年: 青森県海面漁業に関する調査結果書 (属地調査年報). 青森県農林水産部.

アブラツノザメ（日本周辺）の資源の現況（要約表）

世界の漁獲量 （最近5年間）	調査中
我が国の漁獲量 （最近5年間）	2,096～2,462 トン 最近（2024）年：2,404 トン 平均：2,264 トン（2020～2024 年）
資源評価の方法	かけまわし及び底はえ縄の標準化 CPUE により水準と動向を評価
資源の状態 （資源評価結果）	1 が平均値となるように基準化した際の標準化 CPUE の値は、 かけまわしでは 0.50、底はえ縄では 0.69 標準化 CPUE を過去の最大値から 0 の間で 3 等分し、 上から高位、中位、低位とした場合、 資源水準はかけまわしでは低位、底はえ縄では中位、 動向はかけまわしでは減少、底はえ縄では横ばい
管理目標	検討中
管理措置	検討中
管理機関・関係機関	なし
最近の資源評価年	2024 年（漁獲量・CPUE モニタリング）
次回の資源評価年	未定

\* 2024 年の漁獲量は暫定値を用いて推定